



引退賢者は のんびり開拓生活をおくりたい 1

ALPHAPOLIS

鈴木竜一
Suzuki Ryuichi

ジャクリーヌ

《黄金世代》の一人。
強力な魔法で魔物を討伐する
《千変の魔女》として
人々から畏怖されている。
ツン多めのツンデレ。

ウェンデル

《黄金世代》の一人。
大陸一の腕前を持つ
《魔道具技師》として名高く、
彼の作る魔道具はS級冒険者の御用達。
ちょっとオタクなムードメーカー。

エリーゼ

《黄金世代》の一人。
ハーフエルフで回復魔法の使い手。
王都の大聖堂で悩める人々を癒す
《聖女》として崇められる。
性格はおっとり天然。

ブリッツ

《黄金世代》と称えられる、
オーリンの元教え子の一人。
最年少でギアディス王国騎士団
最強の《聖騎士》称号を得る。
物静かで愚直な正義漢。

オーリン

本作の主人公。
大陸一の大国・ギアディスに
その人ありと謳われる
最強の大賢者——だったのだが、
職場である学園に
夢想を尽かし賢者を引退。
《災いを呼ぶ鳥》・ラウシュ島で
開拓生活を始める。

パトリシア

オーリンの元教え子で、
彼を慕う文武両道の美少女。
真面目な性格だが思い込みが激しく、
勘違いで暴走することもしばしば。

イム

バジル村の村長の孫娘。
天真爛漫で
人懐っこい性格に似合わず、
類まれなる格闘センスの持ち主。

CHARACTERS

◆◆登場人物紹介◆◆

第1話 賢者の決断

ギアデイス王立魔剣学園。

国の未来を担う人材を育成するため、戦闘から経済に至るまでのさまざまな分野を、数年にわたって少年少女たちに教え込む。大陸でも一、二を争うエリート養成の教育機関。

現在、俺——オーリン・エドワースは、そこで教師として働いている。

以前は王国の騎士団におり、それなりにやっていた。しかし、十七歳の時……とある作戦行動中の負傷が原因で、騎士を辞めざるを得なくなってしまった。

どうしようか悩んでいたところへ当時の騎士団長が声をかけてくれたのが、学園で働くきっかけだった。

生まれた時から今に至るまでずっと天涯孤独だった俺は、騎士団で戦うことでしか生きる意味を見出せないと思っていた。

だが、人に教えるこの仕事を通して人生が一変した。成長していく生徒たちの姿を見ていると、なんだか嬉しい気持ちになる。

最初は実戦形式の演習助手としてスタートしたが、キャリアを積み、七年ほど前から晴

れて正規の教師となれた。

そうして、俺は王立魔剣学園の教師として国の未来を担う若者たちを指導し続け、いつしかその実績から賢者と呼ばれるまでになった。

「順風満帆に見えた俺の教師生活であったが……今現在、その岐路に立たされている。」

十

「オーリン・エドワース……なぜ呼ばれたか、分かっていますね？」

薄暗い部屋に、女性の声が響き渡る。

眉間にシワを寄せながら黒檀の執務机に肘をつくローズ・アリアロード学園長。彼女は心底腹立たしそうに、俺に向かってそう言い放った。

「……いえ、皆目見当がつきません」

いきなり学園長室に呼びだされた挙句、よく分からない質問をされたので、素直にそう答える。

だって、本当に分からないんだよなあ。

「なんでですって……？」

ローズ学園長は明らかにイラついた声を出し、それから俺をキッと睨みつける。

気に障るようなことを言った覚えはないが、呼ばれた理由について見当がつかないという俺の態度にお冠のようさだ。

「まったく……その程度のことも分からないだなんて……名門と名高い我が学園に、あんなのような無能がいたと思うと残念でなりません」

「……………」

俺は特に反論もせず、黙って学園長の言葉に耳を傾けた。

このギアデイス王立魔剣学園で教鞭をとってから十年経つが、これまでずっと真面目に勤めてきたという自負がある。

それに、教え子たちは皆立派に成長していて、その多くは騎士団に入団したり国政に関わる仕事に就いたりして、今や国を支える重要な人材となっていた。

そんな優秀な教え子を育ててきた自分が、なぜ叱責されなくてはいけないのか。不祥事なんて起こしていないし、まったく思い当たる節がない。

「申し訳ありません。では、この無能めにお教えください——なぜ、私がこの場に呼ばれたのかを」

「……いいでしょう」

ローズ学園長は本日何度目かのため息を交えながら説明を始める。

「次期騎士団長に相応しい我が息子、カイルへの仕打ちを釈明してもらうためです」

「カイルへの仕打ち？」
そこで俺はハッと気づいた。

——すべては今から三ヶ月ほど前に遡る。

俺のクラスにひとりの問題児がやってきた。

問題児の名はカイル・アリアロード。

そう、学園長であるローズ・アリアロードのひとり息子だ。

ローズ学園長はこのひとり息子を大変可愛がっていた。

生まれ故郷どころか両親の顔さえ知らない俺にとって、親子の情愛というものはいまひとつピンと来ない。だが、同僚たちの話では異常と思える愛情の注ぎ方らしい。

なんでもその異常と思える愛情の結果、息子のカイルは実力がないにもかかわらず、成績上位者が集まる俺のクラスへとやってきたのだという。

その時点で、俺は「なぜこの成績で？」と違和感を覚えた。さらには学年主任から、くれぐれも《特別扱い》を忘れるなど釘を刺されてしまう。

そこで俺はようやく気づいたのだ。ローズ学園長の策略に。

カイル・アリアロードの父——つまり、ローズ・アリアロードの夫は、かつて侵略戦争を仕掛けてきた帝国の兵と戦い、激闘の末に勝利を収めて世界に平和をもたらした、紛れ

もない英雄であった。

ローズ学園長は、息子のカイルに夫のような、誰からも尊敬される素晴らしい英雄になつてもらおうと躍起となつていたので。

だが、戦争がなくなつたこの世界では英雄になれない。だからせめて、今現在夫が務めている王国騎士団のトップになつてもらいたいと願っている。

そのためには、どうしても優れた成績が必要になるのだ。
しかし、そんな母の気持ちなどまるで意に介さないカイルは学園始まって以来の怠け者であり、それだけでなく、学園長の息子という立場を悪用して威張り散らしてばかりいた。ハッキリ言って、人の上に立つ器ではなかったのだ。

それでも、同僚の教師たちはカイルに好成績をつける。

彼らは恐れていたのだ——カイルに悪い成績をつけることで、学園長の逆鱗に触れてしまふことを。

王家とのつながりが深いローズ学園長の手にかかれれば、クビなど簡単に言い渡すことができる。
誰が言いなりとなる中、自分が担当している剣術演習の科目で、俺はそのカイルに対して最低評価をつけた。

生徒がどこの家の出身かなんて関係ない。戦場では少しの油断やミスが命取りになりか

ねないのだ。

きちんとした技術や知識を身につけなければ、正しい騎士として任務に就くことは許されない。

それなのに、知識も技術も他の生徒に比べて未熟なカイルに高評価など与えられるわけがなかった。

その結果、俺は小一時間にわたりローズ学園長からクレームを受けた。

成績をつける際に大事にしている模擬演習の結果や、騎士としての品格などを加味したうえで成績だと告げたが、ローズ学園長は取り合おうとしない。

そして評価基準など一切無視して、とにかく最高の成績をつけろと無茶苦茶な要求をしてきたのだ。

俺たちの話は終始平行線をたどった。そしてとうとう、決定的な言葉が放たれる。

「カイルの成績を上げるか下げるか！ どちらかハッキリしなさい！」

ローズ学園長が最後通告ともいふべき二択を迫ってきたのだ。

「……どうしてもご理解いただけませんか」

すべてを悟った俺は深くため息をついた。

相手にするのも疲れたので、成績を一切変える気はないと要求を突っぱねる。

当たり前だ。他の教師がどのような成績をつけようが関係ない。

評価を上げれば、確かに騎士団に入り、団長にもなれるかもしれない。だが実力不足が目に見えている者を団長に据えようとすると愚の骨頂。部隊を危険にさらすだけだ。

魔王討伐なんて大それたことはしないけど、町村を襲うモンスターや野盗の討伐任務は今もよくある。そうした任務に対し、カイル程度の実力の者に団長や隊長を任せたらどうなるか……想像に難くない。

戦場において、リーダーの判断はパーティーの生存率を大きく左右する。

いかなる状況においても、冷静で的確な判断を瞬時に下し、最短の時間で最良の選択をすることを常に求められる。

仮に、カイルがそのような優れた能力を秘めていたとしても、今のようにな成績が上がらないままの状態で高い評価を与えれば、勘違いさせるだけでは何も伸びはしない。

彼のためを思うなら、今は厳しい評価と態度で諭すべきなのだ。若者を指導する者として、これだけはどうしても譲れなかった。

——そうして今に至る。

「カイルの実力を認めることができないというなら——ただちにこの学園から去りなさい」

ローズ学園長はそう言うと、成績表を見せつけながら勝ち誇った笑みを浮かべた。

こうなれば、と俺は自身の考えを告げる。

「そこまでおっしゃられるのなら、私は一線から身を引きましょう」

「なんですって……？」

「わたくしオーリン・エドワースは——本日をもって引退いたします」

真っ直ぐに学園長を見つめながらそう言い放った。

「……そうですか。分かりました」

俺からの引退宣言に怒りを覚えたらしきローズ学園長は「バン！」と力強く机を叩き、ヒステリックに怒鳴り散らす。

「何をしていますか！ さっさと私の前から消え去りなさい！ 目障りだわ！」

俺は重いため息を漏らすと、学園長室から出る。

直後、まるで俺が部屋から出るタイミングを見計らっていたかのように、何者かが声をかけてきた。

「つくづくバカな人だな、あんた」

声のした方へ顔を向けると、そこには壁に背中を預け、ニヤニヤと笑うカイル・アリアロードがいた。

「……聞いていたのか？」

「まあね。しかし、本当に頑固だねえ。てっきりママの提示した条件を呑んであの成績を

撤回すると思ったけど……」

「おまえの成績については正当な評価であり、なんの落ち度もないと自信を持っている。今さら変更はできない」

「はあ……」

盛大にため息をついた後、カイルは「いいか？ よく聞けよ？」と、小さな子どもに言い聞かせるような口調で話し始める。

「これだからあんたみたいな騎士あがりの戦闘教官っていうのは好きになれねえんだわ。

頭の中で筋肉が詰まってんじゃねえの？ もっと賢く生きられないのかねえ」

カイルは小馬鹿にした様子で、人差し指で自分の頭をツンツンと小突く。

「黙って従っておけばクビになることもなかったのに。その年で無職は辛いねえ？」

「仕事はまた探せばいい」

それだけ言い残して、俺はその場を立ち去ろうとする。

すると、背後からカイルの叫び声があった。

「強がってんじゃねえよ！ あんたはいずれ深く後悔することになるぞ！ その時に泣きついてきても知らねえからな！ この負け犬が！」

ギャーギャーと騒ぐカイルを無視して俺は歩き続ける。

そしてそのまま、学園のある王都をあとにしたのだった。

第2話 再就職への道

引退を表明し、学園から去った後、俺はギアデイス王国からも出ると決めた。権力者による不正がはびこるこの大国に、もううんざりしたのだ。

ただ……受け持っていた子どもたちのことが気がかりではある。せめて、最後の挨拶くらいはさせてもらいたかったが、あの様子ではそれさえ許されなかっただろう。

まあ、俺が心配しなくても、みんな優秀だからきつと立派に成長してくれるはずだ。そう信じることにしよう。

こうしてギアデイスを出た俺は魔動鉄道を乗り継ぎ、途中で寄り道をしながら、一週間ほどかけてある場所を目指している。

その地とは——エストラーダ王国。別名、《最果ての地》と呼ばれている。

険しい山岳地帯を越えた先にある海沿いの小さな国で、最果ての地の名の通り、このドアン大陸の最南端に位置する。

他の領地との接触が少なく、さらに国土も大陸一小さい。これといって目立った産業も

なく、大陸最大の国家であるギアデイスとはまさに正反対の国だ。

もうひとつの候補としてレゾン王国という選択肢もあったが、あつちは今、王家であるイアストム家のフィオーナ姫が失踪中とかで国内がごたついているらしい。だから、第一候補からは外しておいた。

十

「エストラーダか……懐かしいな」

久しぶりにこの地に足をつけ、懐かしさに思わず頬が緩む。

教師にやりがいを感じてはいたものの、仕事は激務であり、まともな休日を取った記憶がなかった。

だから、今みたいなのんびりとした時間を過ごすのは実に久しぶりだ。

駅をあとにすると、すぐに港町にたどり着く。

まず感じたのは、爽やかな潮風だ。

エストラーダ王国では、海に近い立地を生かして、盛んに漁業が行われている。

この港町は、朝に水揚げされた新鮮な海産物売ること生計を立てる者が多い。ここでしか獲れない魚も多いらしく、他国から買い付けに来る者もいるのだとか。



そんな活気ある魚市場を歩きながらも、俺はそれらに一切目を向けない。

無職の俺にとっては広大な海を相手にする漁師という仕事も魅力的ではあるのだが、今回の目的はまったく別のところにあった。

「うーん……この時間だと、今日中に到着するのは難しいかな」

港町にある時計塔を眺めながら呟く。

この国で再就職するため王都へ向かう予定だったが、ここからはまだかなり距離がある。移動手段が徒歩しかないの、途中で夜を迎えてしまうだろう。

そういつたわけで、宿を探そうとしたのだが、あいにくと持ち合わせが少ない。魔動鉄道での移動費が思ったよりかかったうえに勢いで飛びだしてきたので、その時に財布に入っていた分が所持金のすべてだった。

「せめて、もう少し金を持ってから出るべきだったな……いや、単純に寄り道をしすぎたのが原因か」

自由になったことが嬉しかった俺は、年甲斐もなくはしゃいでしまったのだ。後先を考えず行動してしまったことを反省する。

こんなところを教え子たちに見られたら、威厳も何もあったものではないな。

そんなことを考えながら歩いていくと、俺の前にある建物が現れた。

他に比べると大きくて立派な造りだ。入口と思われる扉のすぐ脇には木で作られた看板

がぶら下げてあり、ここがどんな施設であるか説明書きがされていた。

「ここは冒険者ギルドだったのか……」

冒険者——それは、漁師以外に稼ぐことができる、この町の数少ない職業のひとつであった。

「ふむ、冒険者か。悪くない選択肢だな」

具体的にどんなことをするか分からないが、冒険者という自由の象徴という印象があった。

何ものにも縛られず、自由気ままに生きる。これまでの俺とは、まるで違った生き方だ。

「少し覗いてみるとするか」

とりあえず、当面の活動資金を確保するため——そう考えた俺はこの冒険者ギルドで、俺でもやれそうなクエストを探してみることにした。

「何をやるにも、まずは先立つものが必要だな」

俺の足取りは軽い。

実をいうと、以前から冒険者稼業には一種の憧れに近い感情を抱いていた。ダンジョンに潜ってモンスターと戦い、勝利してお宝ゲットを試みたいという願望があったのだ。思わぬ形でそれが叶いそうなので、ちよつと浮足だっている。

……いかな。慣れないことと連続で柄にもなく興奮しまくっている。

こういう時こそ落ち着かなくては。

一度深呼吸を挟んでから、俺はギルドへ入る——と、同時に、ギルド内にいた冒険者の視線が一斉に俺へと突き刺さる。

それらの視線は、よそ者である俺に対して強い警戒心をむき出しにしているようだった。どうやら、ここは新入りに厳しい風潮があるらしい。

しかし金を稼ぐ必要がある俺に、そんなことを気にしている余裕はない。受付カウンターへ向かうと、係の女性にライセンスの発行を依頼した。

「それでは、こちらの書類に必要事項をお書きください」

そう言って渡された紙を受け取った時——

「おいおい、字は書けるんだろうなあ、オールドルーキー」

そんな声が出て振り返ると、テーブルに足を乗せてヘラヘラと笑っている中堅冒険者がいた。

「どうやら煽ってきたのは彼らしい。」

目が合ったが、無視。気にせず書類へ必要事項を記入していると、

「おうコラ、無視してんじゃねえぞ」

冒険者の男は立ち上がり、こちらへ詰め寄る。

「この町じゃ見ない顔だなあ……よそから来たのか？」

「まあな」

「だったら、俺がこの町のルールを教えてやる」

男は剣を抜き、切っ先を俺の顔へ向けた。

「登録は有料なんだよ。有り金を全部置いていきな」

「……………」

ギルド内は騒然となる——が、俺だけは違った。

こういう輩は、どこに行つても必ずいる。

学園から外出許可を得て遊びに出た教え子たちがこんな風に絡まれ、助けたことはこれまでに何度もあった。だから、この程度慣れっこだ。

呆れの交じった息を吐くと、これまで対処してきたように、まずは相手がこちらへ向けている剣の先端を指先で摘まむ。

「あ？ なんのマネだ？ それでどうしようと——っ！」

男の表情が一変する。

掴まんだ俺の指を乱暴に振り払おうと剣に力を入れてもピクともしないのだから、そんな顔にもなるよな。

「ど、どうなってやがる……」

男はありったけの力を込めているようだが、それでも剣は動かない。「大口を叩いたわりに、実力はその程度か？」

俺が少し力を入れ、摘まんできた剣を押すと、男は大きく体勢を崩してその場に尻もちをつく。

……ダメだな。これなら、俺の教え子たちの方が強いぞ。

「て、てめえ！」

怒り狂った男は、空いている左手で懐からナイフを取り出す。

大勢の前で自分を虚飯にした俺を切り刻もうと向かってくるが、

「踏み込みが甘い——十五点」

男の放った渾身の一撃を俺は容易くかわし、強烈な右ストレートを脇腹へと叩き込んだ。

「ごはっ!？」

だいぶ手を抜いたつもりだったが、それでも男はギルドの壁に強く叩きつけられ、気を失ってしまふ。

「やれやれ、この程度の攻撃で気を失ってしまうとは……そんなことでよくこれまで冒険者が務まったものだな」

呆れてそう言いつつ、俺は男へ歩み寄る。

受付の女性や周囲の冒険者たちは、目の前の光景に対して開いた口がふさがらない様子

だった。

先ほどは思わず貶すようなことを言ってしまったが、この男は一般的な視点から見ると決して弱くはない。

その実力は周りの誰もが知っているのだろう。

そんな実力者が、冒険者登録すら済ませていない、新米以下の冒険者にあつさり倒されてしまつて衝撃を受けている——まあ、彼らのリアクションから想定されるのはこんなところか。

「マ、マジかよ……あのドリトンを一撃で……」

「一体何がどうなっているんだ……?？」

困惑する冒険者たち。すると、そこへ——

「なんの騒ぎだ！」

揃いの制服を身にまとった騎士たちが、騒ぎを聞きつけて入ってくる。

面倒なことになったな、と俺は頭を掻きながら、騎士たちへ顔を向けた。

「うん?」

すると先頭に立つ、隊長らしき人物に見覚えがあった。

「君は……グローバーか?」

「えっ!? オーリン先生!？」

その人物とは元教え子であった、グローバー・ヒューストン。学園を卒業してまだ数年だが、見違えるほどたくましくなったな。

「まさか、こんなところでお会いできるとは……」

「俺も思わなかったよ。しかし、病に倒れた母親の看病をしながら働くため、学園卒業と同時にギアデイスを出た君が、まさかエストラーダの騎士団で働いているとは。しかも、その若さで立派に隊を率いているなんて驚きだ」

「そんな……まだまだ精進の身ですよ。それより、先生もお元氣そうで何よりです」

「ああ……割とそうでもないのだがな」

「? と、いうと?」

俺はギアデイスで賢者を引退し、この国——エストラーダへの移住を考えているとグローバーに伝える。

「そ、それは本当ですか!？」

途端に慌てるグローバー。

「エストラーダの民である我々としては大変喜ばし——はっ! し、失礼しました!」

「気にしなくていい」

思わず本音が出たか。

まあ、俺としては喜んでもらえたということで悪い気はしない。

ちよūdい機とが会だし、グローバーからいろいろと情報を聞きだすとするか。……その前に、この騒動の後始末をしなくてははいけないが。

十

結局、ギルドでの騒動は周囲の証言もあり、一方的に絡んできた相手に非があるとして俺はお咎めなしとなった。

それどころか、あの暴れん坊には他の冒険者も迷惑していたようだ。対処しようにも、何をしてくるか分からない不気味さがあって誰も近づこうとしなかったらしい。

そんな男を一発で黙らせた俺に、冒険者たちは感謝していた。

事後処理を終えると、グローバーから「馬車で王都までお送りします」と提案される。

「いいのか?」

「今回の事件解決の立役者ですからね。そのお礼も兼ねてですよ」

「そういうことなら、お言葉に甘えようかな」

馬車の準備をしている間、俺たちは思い出話に花を咲かせる。

が、次第に話題は俺の引退の方へと流れていった。

「それにしても、なぜギアデイスがあなたのような優れた人材を手放したのか……理解に

苦しみますよ」

「優れているかとはかく、あの国が理解できなくなっているというのは事実だな」

「……やはり、新しい学園長が問題なのでしょうか？」

どうやら、グローバーも在学中にあの学園長の怪しさに気づいていたようだ。昔から勘の鋭い子だったし、特別驚きはしない。

「まあ、望ましい教育者って感じじゃないかな」

「やはりそうでしたか……全校生徒の前で行ったスピーチの内容などから、そうじゃないかと疑ってはいましたが……」

そこまで読んでいたとは。さすがはグローバーだな。

「まともな判断ができる者なら、オーリン先生ほどの人物を学園から追い出すようなマネはしませんからね」

「逆らう者は容赦しないってスタンスだったからな、あの学園長は」

もしかしたら俺が学園を去るのは、彼女が就任した時、すでに決定事項だったのかもしれない。

「先生がいらっちゃったことを、この国の国王陛下が知れば大喜びですよ。きっと、すべての予定をキャンセルしてでも会談の場を設けるでしょう」

「大袈裟だよ」

「いえいえ、決して大袈裟などではありません。ささ、こちらへ」

元教え子のグローバーに案内され、俺は馬車に乗り込む。

冒険者デビューはお預けとなったが、再就職先の有力候補であるエストラダの王都へは、思っていたよりも早く着けそうだ。

と、安堵した——その時。

「オーリン先生！」

突然名前を呼ばれて振り返る。

そこには、十代半ば頃の女の子が立っていた。

「むっ？」

俺はその子の顔に見覚えがあった……というか、ついこの前まで教え子だった女の子だ。

「パトリシア……?」

彼女は俺が受け持っていた生徒のひとり——パトリシアであった。

「やっ……やっ……と見つけました！」

涙ぐむパトリシアだが、どうして彼女がこんなところにいるんだ？

第3話 賢者のいなくなつた学園

オーリンが引退を表明し、学園を去つた次の日——学園長室にひとりの女子学生が呼びだされていた。

彼女の名前は、パトリシア・グレイソン。

蜂蜜色をしたセミロングの髪に寶石のごとく輝く青い瞳が特徴的な少女で、廊下を歩けば男女関係なく振り返るほどの美しい容姿をしている。

そのため男子から声をかけられることも多いのだが、その誘いをパトリシアはすべて断つていた。

そんなパトリシアが呼びだされた学園長室へ入ると、

「よお、来たな」

待つていたのはローズ学園長ではなく、息子のカイルだった。

「？ なぜあなたがここにいますか？」

「なぜって、呼び出したのは俺だからだ」

「えっ？」

ニヤニヤと笑みを浮かべるカイル。

このように、カイルは何かにつけてパトリシアをつけ回していた。

パトリシアは、母親の名前を使ってまで自分を呼び出したカイルに対し、呆れた様子でため息をつく。

「……特に用事がないのなら帰らせてもらいます」

「おっと、そうつれないことを言うなよ」

「午後からはオーリン先生と剣術の鍛錬をする予定なので」

「オーリン……か」

踵を返して歩き始めたパトリシアだったが、カイルの含みを持たせた言い方が気になつて足を止める。

「……何か言いたげですね」

「いや、別に。——ただ、いつまで経ってもオーリンは来ないと思うぜ？」

「どういう意味ですか……？」

オーリンの名前を出すと途端にパトリシアの様子が変わり、カイルに詰め寄る。

「先生が来ないというのはどういうことなんですか？」

「そうムキになるなよ。たかが教師じゃねえか」

「いいえ。オーリン先生は私にとって大事な人なんです。その先生が来ないと言われたら、

気になるのは当然でしょう」

「大事な人」とハッキリ言いきるパトリシアに、カイルの機嫌が一気に悪くなる。

パトリシアがここまでオーリンにこだわるのには、次のような理由があった。

彼女は孤児であり、違法とされている人身売買組織に高値で売り払われそうになっていた。しかしその直前に、騎士団時代のオーリンに助けられたのだ。

それからギアデイス国内にある施設に預けられたパトリシアに、オーリンは時間を見つけては会いに行った。

オーリンが家族を失った彼女に「自分を実の兄のように思ってくれ」と伝えていたこともあり、パトリシアは彼のことを「兄さん」と呼ぶようになる。

その後、オーリンが騎士団を辞めて王立魔剣学園の教師になると、パトリシアもそこで学びたいと思うようになり、勉強と鍛錬を始め——そして晴れて入学し、今に至るといっわけである。

つまり、パトリシアにとってオーリンは命の恩人であり、家族のいない彼女にとって唯一頼れる存在でもあるのだ。

だからこそ、そのオーリンが来ないと聞かされては、追及しないわけにいかない。

しかし、そんなパトリシアの想いなど、カイルは気にもとめない。

「オーリン・エドワースは昨日付けで学園を辞めたんだ。賢者を引退し、無職のろくでな

しっけてわけだ」

「!? せ、先生が引退!？」

カイルから告げられた言葉は、パトリシアにこれ以上ないほどのショックを与えた。

「そんな……どうして……」

「薄情な男だよなあ。こんなにも想ってくれているパトリシアを置いてさっさと辞めちゃうなんて」

動揺するパトリシアに、ここぞとばかりにオーリンの悪口を言うカイル。

パトリシアの中にあるオーリンの評価を下げようという魂胆なのだろうが、そもそもパトリシアの耳に彼の言葉はまったく届いていない。

尊敬し、憧れていたオーリンが突然いなくなつたというショックが大きすぎて、未だに事実を受け入れることができないのだ。

「オーリン先生がいない学園なんて……」

「もうあきらめろよ。あんな無職の中年なんかより、おまえにはもっと相応しい相手がいるじゃねえか」

カイルはパトリシアを、そつと後ろから抱き寄せてそう囁く。

「悪いことは言わねえ。俺のものになれ。後悔はさせねえぞ?」

「……確か、あなたにはすでに四人の恋人がいると聞いたのですが?」

「あいつらは手柄がいいからな。もちろんん見た目も成績もいいが——それだけだ。おまえには劣るよ、パトリシア」

そう言つて顔を近づけてくるカイル。

誠実さの欠片もない彼の態度に、パトリシアは「最低のクズですね」と言い放ち、顔面に裏拳を叩き込むことで答えの代わりにした。

「ぐほっ!!」

鼻血が出るほどのクリーンヒット。カイルは思わず後退し、顔に手を添えて取り乱す。

「い、いてえ!? 何しやがる!」

「殴ったんですよ。分かりませんでしたか?」

「よ、よくも俺の顔を……くそっ! 鼻が曲がったらどうする気だ!」

「反対側からもう一発打ち込めば治るんじゃないですか?」

「そういう問題じゃねえ!」

怒りをあらわにするカイル。さらに自身の鼻に触れた際、手のひらについた血に気づいて大騒ぎする。

「血っ!? 血だあ!」

「血くらい、実戦形式の訓練を受けていれば出ることもあるでしょうに。その程度のことですらたえていては本番で大変ですよ?」

「う、うるさい! 俺はそんな野蛮な訓練は受けねえんだよ!」

「そういえばずっと欠席でしたね。それでよく進級が——」

会話の途中であることに気づき、パトリシアは動きを止めた。

実戦形式の訓練を評価する担当教師は、今年からオーリンだ。

そのオーリンがいなくなったと告げたのは、訓練をサボり続けていたカイル。だが、カイルは落第するどころか普通に進級を果たしている。

そしてカイルの母親は、この学園の学園長——

「まさか……」

オーリンがいなくなったことに、カイルが——いや、アリアロード親子が関わっている可能性が高いとパトリシアは分析した。

「あなたが——いえ、あなたたちが先生を……」

「い、言っておくが、引退宣言を切り出したのはあいつの方だからな! ママは正当な評価を要求しただけだ!」

「……そうですか。何もかも理解しました。では、失礼します!」

オーリンが学園を去ってしまった事件。

その元凶を把握したパトリシアは力強い眼差しでカイルを睨んだが、すぐに目を背け、さっさと学園長室を出ようとする。

「お、おい！ どこへ行くんだ！」

「信じられないくらい学習能力がないのですね。私がいるべき場所へ向かうだけです」
パトリシアは具体的にどこへ行くのかを明言していないが、間違いなくオーリンのもとであるというのはさすがのカイルでも理解できた。

「！ そ、そうかよ！ セツかく俺が目をかけてやったっていうのに！ そんなにあんな何も持たない男の方がいいのかよ！」

オーリンを侮辱する言葉に反応し、パトリシアが振り返る。

握られた拳を見たカイルはまた殴られると思ったのか、「ひっ!」と短い悲鳴をあげてその場にうずくまった。

「……情けない男ですね」

パトリシアは吐き捨てるように言って、今度こそ学園長室から出ていった。

そして、授業には出席せず、そのままオーリンを追いかけるため学園を飛びだしたのだ。

「待っていてください、先生」

こうしてパトリシアは、エストラダでオーリンと再会するまで旅を続けたのだった。

十

《賢者オーリンの引退》

その衝撃的な宣言は、ローズ学園長が急遽開いた集会により学生たちへも伝えられた。同時に、学園内は騒然となる。

「オーリン先生が引退!」

「マジかよ……」

「いくらなんでも急すぎないか?」

「何か特別な理由でもあるんじゃない?」

学生たちの間では、さまざまな憶測が飛び交っていたが、その原因がローズ学園長と息子のカイルにあるという事実を知る者はいなかった。

——が、このオーリンの引退騒動が、のちに学園を飛び越えて各地に広まり、国家を揺るがす事態に発展することになるとは、学園長はおろか誰ひとりとして予想すらしていなかったのであった。

第4話 新たな職場

俺——オーリンにとって、学園最後の教え子であったパトリシア・グレイソン。

彼女のことは、小さな頃からよく知っている。

まだ俺が騎士団にいた頃——とある人身売買組織を摘発した際、売られる寸前に保護したのがパトリシアだ。

その後、パトリシアはギアデイス王都にある施設へ預けられた。

名前はその時にシスターが名づけたもので、本名ではない。いろいろと手を尽くして彼女の身辺に関する情報を集めようとしたのだが……結局、本当の名前をはじめとして、身元を証明する有力な情報を得ることはできなかった。

保護した当初、パトリシアはほとんど言葉を発することがなかったとシスターから聞いかされていた。

だから心配になって何度か施設を訪れたが……実際彼女は他の子どもと遊ぼうとはせず、常に孤立状態だった。

決していじめられていたわけじゃない。他の子どもたちは一緒に遊ぼうと何度も誘ったのだが、パトリシア自身がそれを受け入れなかったのだ。

しかし不幸中の幸い——という表現が適切なのか分からないが、この施設に来る子どもたちは、自身がそうであったように、彼女も複雑な事情が絡み合っここへたどり着いたことを知っていた。

だからパトリシアが常にひとりでいたいという気持ちにも、理解を示してくれていたようだ。

とはいえ、さすがにひとりで寂しそうにしているパトリシアが可哀想に思えてきて、俺の方からも何度か話しかけた。

最初はなかなか心を開いてくれなかったが、徐々にこちらの質問に対して頷いたり、首を横に振ったりと、気持ちを表現してくれるようになった。

そしてそれから根気強くコミュニケーションを続けていき、とうとう会話できるようになったのだ。

ともに家族がないという生い立ちだったこともあり、俺はパトリシアを実の妹のように可愛がった。パトリシアも、学園に入学する前は「兄さん」と呼んでいたな。

俺が学園を出ると決めた時も、やはり一番気がかりだったのはパトリシアのことだった。だから、パトリシアが俺を追いかけてきてくれたというのは正直嬉しい。だが、彼女には成功が約束されていたから、それを捨ててここまで来てしまっただ丈夫かなという新たな心配も生まれる。

——パトリシアを見ていると、昔のことが鮮明に蘇ってくるな。

俺、パトリシア、そしてグローバーの三人は今、馬車で王都へと向かっている最中だ。

「先生、窓を開けていいですか？」

「構わないが、身を乗りだしすぎて落ちないようにな」
 「む？ さては子ども扱いしていますね？」

「ははは。俺からしてみれば、パトリシアくらいの年齢の子はまだまだ子どもだよ」

「……それは非常に困るのですが……」

「うん？ 困るってどういう意味だ？」

「い、いえ、なんでもありません！」

気まずそうに目を逸らし窓の方に顔を向けたパトリシアは、話題を外の景色へ移した。

「ここがエストラーダ王国……どのような国か学んではいましたが、実際にこうして見ると、書物にあった通りにのどかで平和な国のようですね」

最初は話題を変えるために窓の外を眺めていた様子のパトリシアだが、エストラーダの自然豊かな美しい風土に魅せられたのか、いつの間にか夢中になって景色を楽しみ始める。完全に当初の目的を見失ったみたいだな。

先ほどは子ども扱いしていると言われてしまったが、パトリシアは同学年の子たちの中では、顔立ちも含めて大人びていると思う。

だがそれでも、やっぱりまだ十代の少女だ。

エストラーダの風景にはしゃいでいる今の姿は、年相応に無邪気で楽しそうに見える。

「オーリン先生がエストラーダにいらしたことを告げるため、先に使者を王都へ向かわせ

ました」

パトリシアの隣に座っている俺へ、真正面にいるグローバーが難しい顔をしながら、そう話しかけてきた。

「国王陛下との会談はすぐに認められると思います……こちらでは大臣職を？ それとも、新しく教育機関を立ち上げ、その初代学園長に？」

「おいおい、よしてくれよ。俺はそんな大それたことをするつもりはないよ」

「し、しかし、大国ギアデイスで賢者とまで呼ばれたあなたならば、それくらいの地位を求めても文句なんて出ませんよ？」

「賢者って立ち位置は学園の職員連中が勝手に言い出したただけだ。現に、そのような役職が明確に存在していたわけじゃない。あくまでもただの通称だよ」

というか、よそ者の俺にそんな大役をいきなり寄越すなんてことはさすがにないだろう。それに……冒険者ギルドに寄り道はしたが、俺はあるアテがあつてこのエストラーダにやってきたのだ。

「俺がここへ来たのは、以前エストラーダ国王に相談された、とある島のことを思いだしたからなんだ」

「島……？」

そう言うってから、ハツとした顔をするグローバー。

この国で暮らしているだけあって、さすがに気づいたか。
 「し、しかし、あそこは誰の手も及んでいない、未開の秘境で……」
 「そこを開拓しながらじっくり調べてほしいと、以前依頼をされたことがあってな。あの時はまだ俺も教師として現役だったから断ったが、もしその依頼がまだ生きているのなら、引き受けようと思うんだ」

「先生、鳥つてあそこですか?」

窓の外の景色を眺めていたパトリシアが、そう尋ねてくる。

そこで俺も気づいたのだが、馬車が今走っているのはちよつと小高い丘の上で、王都が一望できる。

王都の賑やかな町並みの遥か先——海上に、薄らと島の輪郭が見える。

「そうだ。あれが調査依頼のあった島……ラウシユ島だ」

ラウシユ島は、海沿いにあるエストラーダ王国の沖合に存在する島。

周辺で頻繁に嵐が起ることから《災いと呼ぶ島》とも呼ばれているが、嵐が発生した日は鳥からレアな武器やアイテムの素材となる木や草花などが流れ着くという。

そうしたことから、エストラーダ王家は長らくこの島を調査しようと多くの人材を派遣していたが、それらは失敗に終わっていたようだ。

俺はかつて、鍛錬合宿をするため学生たちを連れてこの国へ来たことがある。

立ち読みサンプル はここまで

その際、協力のお礼をするため城を訪れたのだが、国王に気に入られ、是非ともあの島を調査してほしいとお願いされていたのだ。

「……オーリン先生なら、必ずやあの島の謎を解明してくださいさるでしょう。きっと国王陛下も喜んで依頼されますよ。何せ、ずっと気にしていましたから、あの島を」

「ほう、国王陛下が……」

今もあの島に関心を抱いてくれているというなら、俺にとってはプラス材料だな。

「先生！ 私も手伝います！」

話を聞いていたパトリシアが、元気いっぱい手を挙げる。

まあ、そう言うと思ったよ。

ここで帰れと言っても聞かないだろう。誰に似たのか知らないが、意外と頑固なところがあるからな、パトリシアは。

「そうだな。君がいてくれると何かと助かるよ。頼りにしているぞ、パトリシア」

「はい！」

嬉しそうにパトリシアが頷いた時、御者の男が「まもなく王都へ着きます」と教えてくれた。

窓の外へ視線を向けると、そこにはさっきの港町とは違う町が見えてきた。

ギアデイスに比べるとだいぶ規模は小さいが、あれこそがエストラーダ王国の王都——